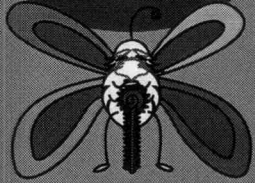


入場無料



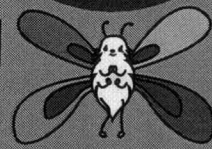
スーベ・ヤムじいちゃん

(社)日本地すべり学会中部支部シンポジウム

「土砂災害防止と災害教育」

—災害教訓とその伝承—

みんな
来てね!



スーベ・ランちゃん

再び襲ってくる災害



平成18年7月豪雨災

自分の命を守る



水防活動(聖徳寺地区)



学ぶ子どもたち



地域の力

知恵を伝える



大蛇と大津波ケル伝説



蛇石伝説



日時:平成21年11月10日(火)
午後1時~午後5時

場所:「いなっせ」大ホール(伊那市)
(JR飯田線伊那市駅から徒歩3分)

<プログラム>

- 11:30~:受付開始
- ★11:30~15:00:ポスターセッション、パネル展示
- 13:00~:開会、支部長挨拶、開催地挨拶(伊那市長 小坂惺男)
- 13:20~:子どもシンポ(伊那小学校5・6年児童による発表)
- 14:00~:基調講演「災害と水文化」(信州大学副学長 笹本正治)
- 15:15~:パネルディスカッション「土砂災害防止と災害教育」—災害の教訓とその伝承—
 - ・司会(信州大学名誉教授 北澤秋司)
 - ・パネラー(信州大学副学長 笹本正治、前 伊那小学校長 北原和俊、信州大学教授 平松晋也、中川村歴史民俗資料館学芸員 伊藤修、伊那市総務課防災係長 山口俊樹)
- 17:00:閉会

★シンポジウム参加を希望される方は、下記の申込先にご連絡ください。なお、一般の方は当日受付にて参加していただけますので、お気軽にお越しください。

【参加申込・問合せ先】※申込用紙は裏面にあります。
 (社)日本地すべり学会中部支部事務局シンポジウム受付係
 (担当:小野) E-mail: ono-kaz@mth.biglobe.ne.jp
 〒390-0851松本市島内東方5037-1
 電話:0263-47-5809 FAX:0263-47-6798

★このシンポジウムはCPD(4.5ポイント)の対象となります。

★シンポジウム終了後に意見交換会を開催します。【場所】「いなっせ」会議室501・503 【時間】17時20分~19時20分 【参加費】4,000円
 (主催)社団法人日本地すべり学会中部支部 (共催)伊那市/伊那市教育委員会
 (後援団体)国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所/国土交通省中部地方整備局三峰川総合開発工事事務所/国土交通省中部地方整備局天竜川ダム統合管理事務所/林野庁中部森林管理局南信森林管理署/林野庁中部森林管理局伊那谷総合治山事業所/長野県/長野県治水砂防協会/長野県砂防ボランティア協会/(社)斜面防災対策技術協会中部長野県支部/上伊那広域連合/伊那ケーブルテレビジョン(株)/飯田エフエム放送/中日新聞社/新連新聞社/長野日報社/信濃毎日新聞社/みのわ新聞社

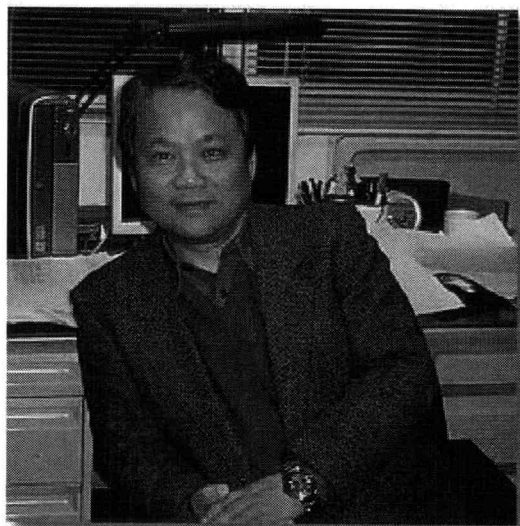
平成21年度（社）日本地すべり学会中部支部シンポジウム

基調講演

災害伝承と水文化

一天竜川上流域災害教訓伝承手法を例に一

講演者プロフィール



笹本正治（ささもとしょうじ）

信州大学副学長

信州大学人文学部教授。博士（歴史学）。1951年山梨県敷島町（現甲斐市）生まれ。

名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了。

前長野県文化財保護審議会会長。

山梨県文化財保護審議会委員、山梨県史編纂委員。

研究は、武田信玄を中心とする戦国時代史、中世から近世にかけての音に対するイメージの変化、災害史、商人・職人史など多岐にわたる。市町村とつながりながら、地域に元気を与える活動も繰り返している。

著書に、『戦国大名武田氏の研究』（思文閣出版）、『蛇拔・異人・木霊』（岩田書院）、『中世の災害予兆』（吉川弘文館）、『武田信玄』（中公新書）、『鳴動する中世』（朝日選書）、『戦国大名の日常生活』（講談社選書メチエ）、『異郷を結ぶ商人と職人』（中央公論新社）、『地域おこしと文化財』（ほおずき書籍）、『戦国大名と信濃の合戦』（一草舎）、『武田信玄』（ミネルヴァ書房）、『実録 戦国時代の民衆たち』（一草舎）、『軍師 山本勘助』（新人物往来社）、『善光寺の不思議と伝説』（一草舎）など多数。

三第

外

天

災害伝承と水文化－天竜川上流域災害教訓伝承手法を例に－

笹本正治（信州大学副学長）

はじめに

大きな流れ

様々な災害－台風、地震、火事、地球温暖化

→雨の降り方の変化などにより天竜川の洪水も懸念される

地域独自の災害－環境と時代

→災害は地域により変化、歴史の中で大きく変化

忘れ去られた災害－現代では目に付かなくなった災害

→干害、流行病→新型インフルエンザ

地域の文化の確認－巨大災害にばかり気を取られていると足下をすくわれる

→もっとも身近な災害に常に気をつけよう

防災のために

地域災害の実態を知る

→歴史学、考古学、民俗学、社会学、社会心理学

人々は過去の災害といかに闘ってきたか

→災害文化研究の必要性

私たちが忘れていた防災知識の確認

マニュアルのみでは対応できない災害

天竜川上流河川事務所では天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会を組織

1 近隣の土石流災害と伝承

災害の事実は忘れ去られがち＝忘れない

岡谷で土石流 鉄砲水 5人死亡3人不明

『長野日報』2006-7-20

活発な梅雨前線の影響で、18日から19日午前にかけて県内は記録的な大雨となり、諏訪地方では土砂崩れなどの被害が相次いだ。岡谷市湊地区と川岸東地区では19日午前4時40分ごろから鉄砲水と土石流が相次いで発生し、住宅を押し流すなどして8人が行方不明となり、うち5人が遺体で発見された。ほかに、辰野町小野で1人が行方不明になっている。この豪雨で、国道20号を含む諏訪地方の幹線道や鉄道が各所で寸断されたほか、約6500人に避難勧告が出された。

同日午前5時40分に設置された岡谷市災害対策本部によると、大規模な土石流は、湊の久保寺付近、川岸の志平（しびら）、鮎沢で発生した。

湊地区では午前5時前に2回の土石流が発生した。久保寺付近では道路に土石流が流れ込み、なぎ倒された近くの神社の大木が、民家に倒れ込んだ。家屋は厚さ30センチ以上の土砂で埋まり、泥の中で横倒しになった車両も。県は陸上自衛隊に災害派遣出動を要請、隊員約130人が捜索した。

午前11時ごろに起きた3回目の土石流は湊小学校近くまで流出。家屋の倒壊や床下浸水などの被害も相次いだ。

午後2時18分、上流部で市消防団第7分団の小坂陽司さん(46)ら男性2人が遺体で見つかった。同7時までには、さらに男女1人ずつの遺体が見つかった。小坂さんは救助作業をしていた際、行方不明になった。160人態勢で捜索しているが、依然として3人が行方不明になっている。

一方、川岸地区の志平では住宅4棟が土石流に流されて倒壊。2人が行方不明となり、同日正午ごろ、林孝幸さん(75)＝川岸東2＝が遺体で見つかった。鮎沢でも家屋が倒壊し、JRの線路内にも土砂が流出した。(以下略)

→この地域は地元では安全といわれていた

諏訪市四賀桑原の鮎沢さんの「鮎沢系図」

鮎澤肥前守六代之孫鮎澤源吾・孫右衛門・姉共＝鮎澤村＝而誕生、姉者橋原村へ嫁ス、此時正保二丙戌五月廿三日、蛇崩レ＝而家屋鋪不残押流され、右兩人漸く命をたすかり闇夜橋原村姉之方江引越、正保三丙戌八月横川村江引移る、正保二兄十才、弟八才

鮎澤肥前守の6代の孫に当たる鮎澤源吾、孫右衛門は姉と共に鮎澤村(岡谷市川岸)において誕生した。姉は橋原村(同)へ嫁いだ。この時、正保2年5月23日(ユリウス暦＝西暦1645年6月7日、グレゴリオ暦＝西暦1645年6月17日)、蛇崩れによって家屋敷が残らず押し流された。源吾と孫右衛門の両人はようやく命が助かり、橋原村の姉の所へ引越した。その後正保3年8月に横川村へ引き移った。蛇崩れにあった正保2年に兄は10才、弟は8才であった。

→土石流が1645年にあった＝もっとふるさとに目を向けよう

災害が起きる前から災害情報の収集

木曾与川(南木曾町)の土石流

南木曾町に与川という川が流れています。その川をさかのぼった山では、貴族の家を建てるために大ぜいの木こりが集められ、役人のもとでたくさんの木が切られていました。その木こりの中に、正直者の与平という男がいました。

ある雨の激しい夜、与平は「トン、トン。」と小屋をたたく音に目をさました。恐る恐る戸を開けると、白い着物を着た女の人が悲しげに立っていました。そして女の人は「これ以上木を切り倒すと、必ず悪い事が起こるでしょう。」と言い残して雨の中にスーッと消えてしまいました。

あくる日、与平はこのことを仲間に話しました。木こりたちはこのことばを恐れて、仕事を続けることを拒みましたが、役人は聞き入れません。こわさのあまり、とうとう与平は「はらが痛い。」と嘘をついて仕事を休んでしまいました。

その夜、いつかの女の人が現われて、「あした雨が降り始めたら、山の頂へ必ず逃げて下さい。」と言い残して、夕闇の中へ消えていきました。

次の日、女の人の言った通り、大雨が降り土砂くずれが起きました。このため、里の家々は後かたもなくつぶされて、中仙道もくずれ去ってしまいました。この時与平は、土砂に流されていく白へびを見ました。実はあの女の人は白蛇の仮の姿だったのです。

このことが起きてから、与平は木こりをやめて、馬方になり尾張の国から食物を運んだということです。

こういうわけで南木曾町には、水難を防ぐ石碑や地藏様が多くたてられています(『私た

ちが調べた木曾の伝説』第五集 19 頁、長野県木曾西高等学校地歴部、1980 年）。

→災害を警告する伝説

実際に存在する地藏尊

目に見える形で災害の危険性、いざという時に備える意識の喚起

→災害伝承の防災への活用

背後に存在する日本人の伝統的な意識

女性が出てくるのは夜＝神仏やあの世のものの活動時間帯

白い着物＝死のシンボル性

天をもたらず（司る）白い蛇

正直者は助かる

『静岡県史』では災害編、『伊東市史』でも自然災害部会が設けられている

→長野県内ではまだそうした編纂はない

2 天竜川流域を幾多の災害が襲った(村澤吟治郎編『赤須・上穂旧記録抄』よりの災害)

慶長 13 年 (1608) 一夏、天竜川大洪水

慶長 17 年 (1612) 5 月一天竜川大洪水で、箕輪郷の田中城及びその城下町である三日町が流失。三日町を天竜川東の現在の所に引き移した。

慶長 19 年 (1614) 8 月一洪水。10 月 25 日大地震。

寛永元年 (1624) 4 月一天竜川大洪水、田島村大水害を被る。

寛永 3 年 (1626) 夏一大干魃で草木が干枯れとなり、河魚は干死した。

寛永 4 年 (1627) 8 月一洪水。10 月 4 日、大地震、所々に潰れ屋があった。

寛永 17 年 (1640) 秋一大凶作。

寛永 18 年 (1641) 春一去秋大凶作のため大飢饉、諸所に餓死する者が多かった。

寛永 19 年 (1642) 秋一再び大凶作。三ツ馬の大飢饉という。餓死者がかなり多かった。

正保 2 年 (1645) 1 月 26 日一浅間山噴火。5 月、木曾大火。

慶安 3 年 (1650) 夏一洪水、地震。

承応 3 年 (1654) 一本年洪水、高遠領民は領外に出る者が 3000 人に及んだという。

明暦 3 年 (1657) 夏一洪水。10 月、浅間山噴火。

万治元年 (1658) 秋一凶作。10 月、浅間山噴火。

万治 3 年 (1660) 4 月 19 日～27 日一天竜川大洪水。被害多し。

寛文元年 (1661) 3 月一浅間山噴火、6 月、洪水。

寛文 10 年 (1670) 夏一洪水。大風、土砂降る。

延宝 2 年 (1674) 7 月一洪水にて今秋凶作。

延宝 3 年 (1675) 秋一凶作、飢饉。

延宝 4 年 (1676) 7 月一洪水。秋凶作。

延宝 6 年 (1678) 一天竜河原開発に付き、上穂村よりの返答書状。

延宝 8 年 (1680) 7 月一洪水。秋より冬大干魃。今冬飢饉。

天和 2 年 (1682) 正月一洪水。天然痘流行。

貞享元年 (1684) 夏一干魃、ただし秋豊作。

元禄 2 年 (1689) 5 月一洪水。

元禄3年(1690)12月6日-赤須上穂両宿火災。
元禄4年(1691)5月-霖雨降り続き、8月洪水。
元禄9年(1696)6月-夏の真ん中に雪降る、次に洪水。本年凶作。
元禄11年(1698)5月-天竜川大洪水にて下平村へ切り込み、未曾有の大惨事。
元禄12年(1699)8月-大風雨にて天竜川大洪水。昨年5月の洪水に次ぐ大洪水。
元禄14年(1701)8月-洪水。本秋凶作につき、飢民多く、餓死者が出る。
元禄16年(1703)10月-地震。11月大地震。伊那地方にも潰れ屋があった。
元禄17年(1704)正月-浅間山噴火。
宝永元年(1704)6月-洪水。秋不作。
宝永2年(1705)6月-洪水、7月、洪水、田畠流失につき、公役視察にくる。
宝永4年(1707)6月-洪水。10月4日、大地震、飯田町にて潰れ屋50軒。11月23日、富士山大噴火、伊那地方にも降灰。
正徳元年(1711)2月-浅間山噴火。9月、洪水。
正徳3年(1713)9月13日-雪降る。
正徳4年(1714)3月15日-地震。
正徳5年(1715)6月17日~24日-伊那郡に未曾有の大雨、各川とも大洪水、田畠、家屋、道橋等の流失限りなし。
享保元年(1716)8月-洪水。秋千魃、下平村川除普請始まる。
享保2年(1717)5月~7月-干魃。7月23日、地震。8月、浅間山噴火。今秋大凶作。
享保3年(1718)7月26日-大地震。遠山地方被害多し。9月3日、浅間山噴火。
享保4年(1719)8月15日、大洪水。千曲川筋大被害。
享保5年(1720)5月-浅間山噴火、天竜川洪水。8月、再洪水。
享保8年(1723)正月1日-浅間山噴火。8月洪水。
享保9年(1724)8月6日-大風雨、被害多し。
享保13年(1728)8月-洪水。9月、また洪水。10月、浅間山噴火。本年凶作。
享保14年(1729)10月1日-浅間山噴火、秋豊作。
享保16年(1731)4月-洪水。8月、大洪水。9月、また洪水。ことに8月は大洪水で、天竜川氾濫し、下平村は田畑流失が多く、後世これを「亥の川欠け」という。
享保17年(1732)春-麦作大異作、6月、霖雨にて冷気。秋、各地に害虫が発生。
享保18年(1733)6月20日-浅間山噴火。7月、洪水。秋、大凶作、所々に餓死。
享保19年(1734年)8月-洪水。秋凶作。
元文元年(1736)11月9日-暴風雨、木下陣屋吹き倒される。
元文3年(1738)5月~8月-雨降り。5月、太田切川満水。8月、洪水、田畑流失。
元文4年(1739)4月11日-高遠町大火。焼失戸数169軒。
寛保元年(1741)6月-洪水。8月、大風、稲に害虫発生。
寛保2年(1742)8月-大洪水。ことに千曲川大洪水。
寛保3年(1743)8月6日~20日-大雨、天竜川洪水。
延享4年(1747)5月19日-中田切川満水にて、座光寺為勝通行の際、供回り3人溺死。
寛延元年(1748)6月~8月-干魃。8月5日、雨乞い。秋、凶作。
寛延3年(1750)4月-大雹降る。人畜に死傷あり。草木野菜等に大被害。

宝暦5年(1755) 夏一天竜川洪水、「亥年の洪水」とよぶ。
明和2年(1765) 5月一大洪水。8月、再洪水。
明和4年(1767) 春一霜害あり春蚕不作。5月、干魃。
明和7年(1770) 6月一大干魃にて野菜類干枯れ。天竜川大減水。歩行で渡れたという。
安永7年(1778) 春～秋一干魃で野菜類干枯れる。
安永8年(1779) 7月一洪水。8月、焼砂降る。
安永9年(1780) 6月一霖雨降り続き冷氣、7月は干魃で諸所で雨乞いを行う。
天明2年(1782) 7月一浅間山大噴火。本秋大凶作。この年大風雨で五穀実らず凶作飢饉。
天明3年(1783) 4月～7月一浅間山大噴火、伊那地方まで降灰。5月29日、雹降る、人畜草木に被害。8月24日、雪降る。田畑に害虫発生し、大被害。当秋、未曾有の大凶作。
天明4年(1784) 春一昨秋以来の未曾有の大飢饉。
天明6年(1786) 一雨多く、冷氣で、五穀不熟、大凶作となる。
天明7年(1787) 春・夏一共に雨がちで、冷氣のため五穀不作。秋、凶作。
寛政元年(1789) 6月17日、18日一天竜川満水で沿岸地方に被害。8月、再び洪水。
寛政3年(1791) 7月一大干魃、所々で雨乞い。今秋、凶作。
寛政6年(1794) 7月一稲に害虫が発生し、今秋大凶作。
寛政7年(1795) 秋一豊作なれど、稲に少々虫つく。
寛政8年(1796) 正月一天然痘流行。
享和2年(1802) 3月一流行性の風邪はやる。
享和3年(1803) 正月一麻疹流行。5月26日、浅間山噴火。6月、洪水。9月23日、浅間山再噴火。
文化3年(1806) 7月一洪水。
文化4年(1807) 5月27日～6月3日一大雨、大洪水で田畑流失多く、ことに天竜川、上穂沢川、太田切川、中川、大満水。
文化5年(1808) 7月25日一大雨洪水、当年気候不順。
文化6年(1809) 3月1日一赤須上穂両町全焼。8月、大風。7月、天竜川、三峰川洪水。
文化10年(1813) 9月6日一大霜降る。この年不作。
文化11年(1814) 6月一干魃。
文化13年(1816) 閏8月2日～6日一大風雨、大荒れ。
文化14年(1817) 7月一大干魃。
文化15年(1818) 5月一干魃につき諸方で雨乞いを行う。
文政4年(1821) 5月～7月一干魃。
文政8年(1825) 8月一夏以来雨多く、蝗が発生し秋凶作。
文政10年(1827) 4月一洪水。6月7月、洪水、諸橋流失、諸井欠。
文政11年(1828) 5月～7月一天竜川を始め太田切川当洪水度々、田畑並びに道橋流失。
文政12年(1829) この年中一太田切橋流失8回。
文政13年(1830) 2月14日一洪水、太田切川橋流失。5月9日、太田切川橋流失。8月9日、洪水、太田切川橋流失。
天保2年(1831) 5月一干魃、秋凶作。
天保3年(1832) 3月4日一高遠町大火。夏以来霖雨降り続き、時々洪水。米価高騰。

天保4年(1833)4月～6月一長雨、稲田に害虫発生。7月、不順の気候で米価高騰。
天保5年(1834)8月一洪水。秋凶作。11月～12月、疱瘡流行。
天保6年(1835)6月30日一風。8月5日～13日まで、大風雨、凶作となる。
天保7年(1836)4月一大雨洪水。6月、雨天続き、山笹に実なる。6月、飢民多く、餓死や出る。7月2日、大雨で洪水、所々に山崩れ、山抜け等があり、被害甚大。8月、大風。8月13日洪水。秋、未曾有の大凶作。悪疫流行して死亡すこぶる多く、米貨暴騰。
天保8年(1837)正月一米価ますます高騰。
天保9年(1838)3月17日一赤須町上穂町大火。4月24日～26日、大雨降り続く、太田切川橋が流失。
天保14年(1843)11月一天然痘が流行、死亡者多し。12月、飯島町大火。
天保15年(1844)3月22日一風雨。
弘化2年(1845)4月17日一赤須上穂両宿大火。
弘化3年(1846)正月一疱瘡流行。4月16日、大霜降る。5月1日、大風雨洪水、諸橋流失す。50年来の大荒れといわれる。
弘化4年(1847)3月7日、8日一大雨降り洪水起こる。3月24日、善光寺大地震。4月17日、大雹降る、農作物に被害あり。8月上旬、にわか冷気、8月28日大霜降る。
嘉永元年(1848)2月、疱瘡流行、悪性にて死亡率高し。6月、天竜川大洪水、田原殿島大被害、水死者あり。閏4月18日、大風雨。
嘉永3年(1850)5月下旬より一霖雨。6月、洪水引き続き雨天、冷気。7月21日、洪水。9月より翌年2月まで、天然痘流行。
嘉永4年(1851)春一天然痘流行、秋、コレラ流行。8月1日、洪水、秋稲虫発生。
嘉永5年(1852)6月一干魃、雨乞い。8月16日、大風雨、諸橋流失。12月11日大雪。
嘉永6年(1853)2月一地震。7月、各地干魃。
安政元年(1854)2月一天然痘流行。2月14日、地震。4月26日、大風雨。6月18日、風雨。6月19日大雨洪水。11月4日、安政大地震、稲地方被害あり。
安政3年(1856)2月一疱瘡流行。3月21日、飯島町大火。
安政4年(1857)閏5月17日、18日、大雨洪水。閏5月23日、朝地震。6月28日、淡雪降る、寒冷、東嶽に雪降る。10月19日、初雪降る、大吹雪。
安政5年(1858)正月3日、大雪。6月17日、雹降る。6月21日、洪水。8月～9月、雨天がち。全国にコレラ大流行。
万延元年(1860)4月～7月一雨がち。5月21日、数日来大雨降り続き洪水。5月15日、太田切川大洪水、文化4年の洪水以上といわれる。秋凶作、物価高騰。
文久2年(1862)正月元日一大雪。6月、旱天。7月、洪水。8月、天然痘・麻疹流行。
文久3年(1863)5月一麻疹並びに疫病流行し、死亡者多し。8月、高遠町大火。9月4日・5日、大霜降る。蕎麦皆無。田畑凶作。
元治元年(1864)4月1日・2日一両町大霜降る。桑芽大痛み、苗代に氷り張る。4月14日、大霜降り刈敷株痛み。
慶応元年(1865)2月一疱瘡流行、悪性で小児の死亡多し。閏5月17日、豪雨大洪水、太田切川の本瀬が下平井筋に切り込む、田沢川また満水。12月21日、大雪降る。
慶応2年(1866)8月7日一台風、田畑山林共に大被害あり。8月15日、再び大風雨、今

秋凶作。

→洪水や地震災害は土石流や地すべりとセットになる

3 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会

災害教訓伝承の現状と必要性

天竜川上流域には、過去の災害にまつわる歴史資料、石碑・遺構、民間伝承が比較的数量多く残っている。これらの歴史資料、地物、伝承内容は、災害の脅威や対策方法を後世に伝え、豪雨災害時の地域防災力の底上げや、被害軽減に資する貴重な資源である。しかしながら、これらの資源が地域防災力の底上げに十分に活用されているとは必ずしも言えない状況にある。その問題点として以下のことが考えられる。

① 災害を経験したことにより得た教訓（知恵、知識）が十分に伝承されているか、また活かされているか定かではないが認識されていない。

② 過去の大災害等については、災害経験者の高齢化等に伴い、災害に備えるための知恵や教訓が後世に語りつがれないことが懸念される。

③ 数多く残っている地域に残存している歴史資料や石碑・遺構も、伝承の観点で要領よく整理されておらず、経年とともに散逸や風化のおそれがある。

④ 近年に見られる気象変動による集中豪雨など、治水事業の計画水準を越える超える洪水に対して、被害を軽減する上でためには、正しい知識に基づき、自らの身を自ら判断して守る、近くの人を助け合って守る、自助、共助が重要なキーワードとなるによる災害対応の重要性が高まっている。しかしながら、仮に災害教訓が伝承されず、自らの住む土地に対する正確な情報・理解を住民が有さない場合、災害時の避難行動や行政による災害対策活動の実施、また平常時における治水事業の実施などの面で大きな支障となることが懸念される。

笹本正治 信州大学人文学部教授

織井秀夫 三峰川みらい会議代表

北澤秋司 信州大学名誉教授

北原和俊 伊那小学校校長

木村玲欧 名古屋大学災害対策室助教

桜井弘人 飯田市美術博物館学芸員

武井孝博 中日新聞飯田支局支局長

平林彰 長野県埋蔵文化財センター調査部長

宮沢孝明 飯田市役所危機管理部長

伊藤仁志 天竜川上流河川事務所事務所長

→川を含めた防災がハード面のみでは足りないことの認識

説明責任

天竜川上流河川事務所の先駆性＝『語り継ぐ天竜川』

災害教訓伝承の収集

聞き取り

年齢差、性差、本当に伝わっているのか、経年差

文献調査

江戸時代以前の文献、市長村史、県史

→古い時期の郡誌のようなものに案外情報が多い

調査をもとにしての災害伝承ツール

*災害伝承ビデオ

子ども（小学校高学年以上）から大人までを対象とし、無関心から気づきへ到達するための働きかけを行うこと目的とした。なお、地域リーダーなど意識レベルが高い層の場合、映像を見ることにより気づきから正しい理解、さらに利用の仕方によっては適切な判断・行動まで至ることも想定した。

*災害伝承カルタ

過去に天竜川流域で起きている豪雨災害について、災害を経験した様々な立場の人の災害教訓（知識、知恵）、また災害から身を守るために大事なことを子供に伝え、記憶に残すことが、いざというとき、子供たちの命を救うことになる。そこで絵札でイメージを湧かせ、読み札により大切な事柄を伝承することができ、内容を繰り返し遊んで学べる「災害伝承カルタ」を作成した。

*災害伝承データベース

伝承や過去の災害情報は防災情報として有用であると同時に、住民への防災啓発の際に不可欠の情報である。そこで、歴史災害による被災箇所、被災状況の情報について、災害事象及び教訓伝承の位置図をベースとしたクリックブル形式でのとりまとめを行った。なお、将来的にホームページ等に掲載し住民へ情報提供することに留意し、HTML形式で作成した。

モデル地域における災害教訓の伝承手法選定

【伊那市地域】

実施主体＝伊那小学校、三峰川未来会議、天竜川上流河川事務所

テーマ＝被災経験を振り返り“雨のおそろしさ”について考える学習活動の実施

素材＝平成18年7月の豪雨体験（実体験）、災害体験者のお話、災害伝承ビデオ、災害伝承カルタ

訴求対象者＝子供（伊那小学校の4年生～6年生）とその家族

防災意識＝「無関心」→「気づき」→「正しい理解」

ねらい＝自分たちの災害体験を思い出し、過去の災害について学習することにより流域内の災害について正しい理解を促す。雨のおそろしさについて認識した上で、これから災害に備えてどのようなことが出来るのかについても考え、正しい理解までの導入を行う。また子どもを通して大人も巻き込み、親の学習にもつながる取り組みとなるような仕組み作りを行う。

【駒ヶ根市～中川村地域】

実施主体＝中川村教育委員会、天竜川ゆめ会議、天竜川上流河川事務所

テーマ＝理兵衛堤防や石神の松などをめぐるウォーキングツアーを開催し、実物を見ることにより災害教訓の伝承を行う

素材＝理兵衛堤防 / 石神の松 / 川の碑 / 常泉寺

訴求対象者＝働き盛り世代、中高年世代、地域リーダー

防災意識＝「気づき」→「正しい理解」

正しい理解」→「的確な判断・行動」（コース別）

ねらい＝ウォーキングや遺構めぐりなどに興味のある年代を対象に、理兵衛堤防や石神の松といった災害にまつわるスポットを回りながら、地域に語り伝わる信仰や文化、先人の知恵などのお話を聞くことにより、流域での災害認識を高める

【飯田市地域】

実施主体＝飯田市役所、竜水開発組合、まちづくり委員会

テーマ＝飯田市で行われるイベントと連動して、地域防災力向上のためのプログラム実施

素材＝飯田市における防災関連の行催事

訴求対象者＝働き盛り世代、中高年世代

防災意識＝「気づき」→「正しい理解」

ねらい＝飯田市の防災関連の行催事に合わせて、すでに防災への意識が高い人たちを対象に「正しい理解」へ意識を変化させるためのパネル展示や講習会を開催し、地域防災力の向上を目指す

その他

実施主体＝飯田市美術博物館、飯田エフエム放送、地元新聞各社、放送局

テーマ＝飯田市美術博物館で気軽に立ち寄れる防災イベントの実施

素材＝飯田市に伝わる民話・伝説

訴求対象者＝子育て世代、働き盛りの世代

防災意識＝「無関心」→「気づき」

ねらい＝飯田市美術博物館のオープンカフェを利用し、気軽にイベントに参加できる雰囲気を作り、防災にあまり興味のない子育て世代、働き盛りの世代にも災害教訓の実施を図る

実施結果

アンケートなどにより一定の効果が証明された

今後の課題

どのように持続させるか

→単なる一過性のイベントで終わらせないために

事務局

→天竜川上流河川事務所の負担

データの更新

→誰がどのように担うのか

地位の図書館などとの連携

→情報の地域浸透

学校の授業と教員

→特定の教員だけでは駄目

4 駒ヶ根市の災害伝承と水文化

《人は水によって生きる》

飲み水、調理、農業

→水無くして人間は生きることができない

諏訪信仰や戸隠信仰の源は水分信仰＝水に対する信仰

《雨のない災害》

稚児石（光善寺・赤穂）

光前寺本堂の裏山に稚児石とよぶ大きな石がある。大沼湖の南、堂平の西北で、堂平は現在の光前寺が建立される以前の縁りの地と言われている。

当寺に奉仕する稚児が、奉納舞を舞い損じたため、この石の上にてお仕置きを受けたと言っている。また一説には、ある干魃の年、雨乞の祈願に二十数名の稚児が舞ったところ、舞いが下手だったため、神の怒りに触れ一陣の風に巻き上げられて一かたまりの岩にしてしまった。それが稚児石であると言う。（『駒ヶ根市誌 現代編 下巻』588頁）

雨乞淵（中沢・上割百々目木）

上割の百々目木に雨乞淵という淵がある。里人が降雨を渴望する時、ここに来て祈るのを常としていた。この時中割蔵沢寺の青獅子を借りて祈ったという。

また、近在の人がこの淵の主にも、借りたい膳椀を紙に書いてお願いすると、次の日必ず淵の岸に置いてあった。ところが心のよくない人が借りた膳を返さなかったばかりに、その後は誰がお願いしても貸してくれなくなったという。

近年ここに堰堤が作られたが、淵の佛は今も残っている。蔵沢寺の青獅子は普通の獅子より形が扁平で、何度も淵に投げ込まれたような傷がついている。（594頁）

→水がない災害

《防災のために》

太田切川の川除林（駒ヶ根市）

元禄四年（一六九一）、太田切川の天竜合流点へ二十数歩にわたり植林した。長さ七百間、幅百間は戦後まで残存したが、現在伐木、開鑿されて水田地帯に変わり、県立西駒郷ほかの施設中に僅かに残る松林に其の面影を留めている。（『歴史の道調査報告書 天竜川』55頁、長野県教育委員会、1990）

→江戸時代から水害に備える装置＝当然災害が頻発したため

《あの世とつながる淵》

かつら淵の河童（中沢・菅沼）

菅沼の下間川下流にかつら淵と呼ばれる淵があった。昔、この淵に河童が棲んでいて、川へ遊びにくる子どものしんのこをぬくので、子どもたちはこわがってだんだん近寄らなくなってしまった。河童は淵の奥へかくれようと下がるうち岩が二つに割れてしまった。

それ以来河童は淵に姿を見せなくなったという。（595頁）

河童の妙薬（東伊那・大久保）

太田切川が天竜川に吐き出し、天竜東岸に突き当たる地点に^{きが}下り松とよぶ淵がある。高遠藩の川奉行を勤め、大久保に屋敷を構える中村新六は、寛政年間大久保城趾の底部に隧道を開鑿して、この淵の水を引き所謂新六島五町歩の開田を行ない、高遠郡宰阪本天山から其の功績を称揚され墾田の碑が建てられた。中村家にはこの新六殿（道民、雅号孟璣）が淵に棲む河童から妙薬製法の秘法を伝授したという話を伝えている。

この下り松の淵には蛟竜と河童が棲むと恐れられていた。寛政元年（一七八九）秋霜幾日か降り続き、天竜川が氾濫、ために川筋が西に移って、下り松の淵がすっかり涸れて潟

となってしまう。涸れた淵から一夜蛟竜が西の瀬へ泳ぎ去るのを見た人があったという。河童は淵が涸れて難渋の余り、新六殿が墾田の帰途、良いことを教えてあげるからと、馬の尻尾につかまって屋敷まで来、痛風の妙薬の作り方を伝授したという。河童伝授の妙薬「加減湯」は諸国に販売されて大変繁昌した。この繁昌は大正初期まで続いた。中村家の屋敷裏に河童の池と称する池があるが、現在は水が涸れてしまっている。(597頁)

→河童と淵

お棚送り

(八月)十六日の朝御飯を供えたあと、盆棚をこわして、盆中供えた物はお花と一緒にガマゴザに包み、その上に線香を一把つけて立て、天竜川の大橋の上から川へ流した。今は辻へまとめて青年会が片付ける。(辰野町平出) (『長野県上伊那郡誌』 民俗篇上』740頁)

《様々な水害伝承》

さんよりこより (伊那市美篤)

天伯社は伊那市美篤川手の産土神で、杜は上川手・下川手の間、青田の中の杜のうちに祀られている。

この辺りは「川下り郷」とよばれ、三峯川の氾濫原で古来水害の多かったところ、それだけに肥沃なムラでもある。この天伯社はある年の洪水に上流の片倉から流れれてきた天伯様を祀ったものと伝えられ、元禄の検地帳には「河天伯」と記されている。(上 852頁)

→水害が前提

《俗信》

天気に関する兆し

○動物に関するもの

雨蛙が鳴くと雨が降る。

長雨のとき蛙が鳴くと、天気がよくなる。

トノサマガエルが鳴くと、天気がよくなる。

四、五月頃蛙が鳴かない晩は霜がおりる。

魚がえさをあさるときは、次の日には必ず雨が降る。

鯉が水面ではねると雨になる。

カジカの腹に砂があるときは、川が荒れる。

猫が顔を洗うと雨が降る。

猫が顔を洗うとき、耳の後ろからすると雨になる。

猫がしおれている時は雨になる。

遠い犬の鳴き声がよく聞こえる時は、天気が悪くなる。

○植物に関するもの

山木蓮又は山栗の花が多く咲く年は洪水がある。

梨の花が多く咲く年は洪水がある。

○自然に関するもの

穴山に横雲ができると雨。(中沢・赤穂)

今なぎ山に横雲ができると雨。(赤穂)

南駒が曇ってくると雨。(七久保)

東山の地獄谷に霧がかかると雨。(赤穂)

→地域の人々は自然の中に身を置いて、体で情報を得ようとした

*全体として駒ヶ根は水害などの伝承が少ない

→いい地域だから

まだ目が向けられていないから

おわりに

水の二面性を常に意識しよう

水の恵で生きる

水は災害ももたらす

大地も同じ

大地のおかげで生きる

地すべりなど災害もある

日常的な災害認識

自分の住む地域の危なさを知る＝過去の歴史

伝説や諺＝簡単な形での反覆

先人に対する尊敬

早急に求められる過去の知識の収集＝意識せずに情報は集まらない

→記録しよう

文字を媒介しない場合、記憶は伝えにくい

人生に一度程度以上で繰り返される災害は記憶される

民俗の中の災害文化(伝説、ことわざ)

→災害文化になる

目に見える形での災害の怖さの認識

科学万能主義に対する見直し

大災害でも時間経過があると忘れ去られる＝地震、津波

松本の牛伏寺断層の経験は伝わらない

阪神淡路大震災も過去のことは忘れられていた

時代の中で災害対象は変わる＝旱害、疫病

文化による対応

新たな災害の可能性＝原発事故など、自殺者問題

社会変化の中での共有

阪神淡路大震災、スマトラ沖地震と津波

→マスメディアの力

国際性

記憶媒体の変化

映像や音として残しうる、出版など

地域性の喪失

地域災害が無くなったわけではない

自助→共助→公助

自分のできることは自分で、そして公は個人でできない部分を
国家の意義は国民の生命及び財産の保障

何といっても地域で守ろう＝共同体

災害認識の変化

災害は結果か、これからの予兆か

自然観の変化

人間も自然の一部

個人の経験の蓄積の減退

皮膚感覚の喪失

対応するのは現場の人間

けがなどの対処の基礎的知識

災害現場にいる人が即座に対応する手段と力を作る

個人で対応する力をつける

自ら身を守る手段の確立

行政任せ、他人任せへの反省

役に立つ教育・思いやりの教育

一般的知識偏重に対する問いかけ

生きていくのに必要な教育

学校自体が災害になっていないのか

人と人のつながりをどうするか

実際面での人の協力＝消防団、隣組、会社

文化を伝える人のつながり＝父から子へ、社会から個人へ

防災の拠点としての家庭・地域

従来になかった災害

化学物質など目に見えないものによる新たな災害

コンピューターを通じて

国境のない環境破壊＝酸性雨・オゾン層の破壊

食料輸入国である日本と経済力＝経済力が無くなった時に日本人は何を食べるのか

世界戦争＝日本の意図にかかわらず巻き込まれる戦争

人口爆発＝地球は人間を養っていいのか

個人ですること

食料・水・燃料・衣類・ラジオ・医薬品など緊急用品

対応する手段、知識のマニュアル化

環境問題など自分で対応できることを如何にしていくか

行政サイドの対応

緊急時に職員をいかに集めるのか→職員も被災している

指揮系列をいかに取るのか→国家や県との関係、自治体の長がいなくなったときには如何にするのか

広い部局にまたがる問題をいかにまとめるか＝行政の細分化と統合化

大災害時には救急車も足りない

ボランティアとは

多様な災害のあり方と柔軟な対応→絵に描いた餅でない防災マニュアルを

笹本正治(ささもとしょうじ)

信州大学人文学部教授。博士(歴史学)。1951年山梨県生まれ。1974年信州大学人文学部卒業。1977年名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了。同年から名古屋大学文学部助手になり、1984年信州大学人文学部助教授。1994年より現職。

著書に『戦国大名と職人』(吉川弘文館・1988)、『武田氏三代と信濃—信仰と統治の狭間で—』(郷土出版社・1988)、『戦国大名武田氏の信濃支配』(名著出版・1990)、『中世の音・近世の音—鐘の音の結ぶ世界—』(名著出版・1990)、『辻の世界—歴史民俗学的考察—』(名著出版・1991)、『中世的世界から近世の世界へ—場・音・人をめぐって—』(岩田書院・1993)、『戦国大名武田氏の研究』(思文閣出版・1993)、『蛇抜・異人・木霊—歴史災害と伝承—』(岩田書院・1994)、『真継家と近世の鋳物師』(思文閣出版・1996)、『長野県の武田信玄伝説』(岩田書院・1996)、『中世の災害予兆—あの世からのメッセージ—』(吉川弘文館・1996)、『武田信玄—伝説的英雄像からの脱却—』(中公新書・1997)、『川中島合戦は二つあった—父が子に語るに信濃の歴史—』(信濃毎日新聞社・1998)、『鳴動する中世—怪音と地鳴りの日本史—』(朝日選書・2000)、『戦国大名の日常生活—信虎・信玄・勝頼—』(講談社選書メチエ・2000)、『山に生きる—山村史の多様性を求めて—』(岩田書院・2001)、『異郷を結ぶ商人と職人』(中央公論新社・2002)、『災害文化史の研究』(高志書院・2003)、『地域おこしと文化財』(ほおずき書籍・2004)、『戦国大名と信濃の合戦』(一草舎・2005)、『武田信玄—芳声天下に伝わり仁道寰中に鳴る—』(ミネルヴァ書房・2005)、『実録 戦国時代の民衆達』(一草舎・2006)、『軍師山本勘助—語られた英雄像—』(新人物往来社・2006)、『善光寺の不思議と伝説—信仰の歴史とその魅力—』(一草舎・2007)、『天下凶事と水色変化—池の水が血に染まるとき—』(高志書院・2007)、『村上義清とその一族』(信毎書籍出版センター・2007)、『中世の音・近世の音—鐘の音の結ぶ世界—』(講談社学術文庫・2008)、『戦国時代の諏訪信仰』(新典社新書・2008)、『武田信玄と松本平』(一草舎)、『真田氏三代』(ミネルヴァ書房)、『修験の里を歩く—北信濃小菅—』(高志書院)などがある。